

## 北齊碑刻書法にみられる復古主義について

徳泉 さち (早稲田大学)

中国、南北朝時代の後半にあたる東魏(534~550年)、北齊(550~577年)時代の書に関する専論は少なく中国書法史上、等閑視されてきた時代といえる。それは際立った名品に乏しく、北朝の書といえば、北魏の龍門造像記ばかりに目が注がれるためであろう。

東魏北齊とも短命な王朝であり、現存作例も決して多くはない。しかし、この両王朝の石碑に刻まれた文字、すなわち碑刻文字の書が、両者で大きく相違することは概説書等でも度々指摘されてきた。東魏の碑刻が前代の北魏書法をおおむね継承して楷書で書かれているのに対して、北齊では遥かに遡る後漢から三国時代の碑に用いられた隸書で書かれているものが大半を占める。五世紀後半頃から楷書で書かれた石刻が多く見られるようになり洗練を増しながら隋唐楷書へと至る大勢の中で、ひとり北齊碑刻は逆行するような旧法が採用されていることになる。

石碑は一般に、碑文が衆人の目に触れ、末永く後世に伝わることを目的とする。碑刻文字そのものもまた、各時代の最も正式とされるものが選択され、能書家の手で書かれることが望まれた。つまり、碑刻の書は制作者が有する文化やその水準を端的に示すものとも言える。それを踏まえれば、北齊という特定の王朝において現れた変化は、単なる個人の好尚や流行に起因するものとは考えにくい。本発表では、北齊碑刻書法の特徴を再検討し、従来、漠然と指摘されてきた復古主義がどのような意図のもとに発せられた動きであるか明らかにすることを試みる。

そこで注目すべきは、東魏の武定四年(546)に前代の都である洛陽から鄴(東魏の都)へと石経が移設された記事である(『洛陽伽藍記』卷三、『魏書』卷十二)。石経とは儒教の正統な經典を公示するための碑刻であり、後漢と三国時代魏に国家的事業として建立された。そのテキストもまた最も正しいとされる文字により刻まれている。北齊ではこれら二種の石経が官立の学校である国子寺の前に並べて設置され、文教のシンボルとして扱われていた。この石経には隸書が用いられており、北齊の碑刻文字のなかには石経文字と類似した作例が見受けられる。つまり、北齊隸書は石経文字に範を求めたことが想定され、その復古主義の目指すところは漢魏時代に正統とされた書法への回帰であったと解せよう。

非漢族出身とされる高歡により事実上創始された北齊王朝が漢民族文化にどう対峙したのか。中華文明の精粹ともいえる書法、とりわけ公的な側面の強い碑刻書法の動向はそれを伝える重要な手がかりとなるだろう。本発表では仏教美術や墓装美術作品を中心に論じられてきた北齊美術史に新たな視点を提示することを試みる。従来の中国美術史研究では絵画や彫刻が主軸として扱われ、書法作品が看過されてきたくらいは否めない。両者の研究を融合させることによって、より根源的な中国美術史の理解が得られるであろう。